ごあいさつ

鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて活躍した禅僧・関山慧玄（一二七七－一三六〇）は大本山・妙心寺の開山として知られ、日本における臨済宗の礎を築いた人物です。この地域とも深いかかわりを持ち、悟後（悟りを開いた後）の時代には美濃の伊深（現在の美濃加茂市）に庵を結んで、村人とともに農耕に勤しむかたわら修行に励んでいたといわれます。関山の霊跡であるこの地に江戸時代初期に成立した正眼寺は、開山を関山に仰ぎ、毎年十月に行われる開山忌は伊深の一大行事として知られるものです。伊深の各地には今でも関山にまつわる伝説や地名が伝わり、この山里にのこした遺徳の大きさが偲ばれるでしょう。

今回は、このたび当館に寄託された関山ゆかりの伝承をもつ「箱笈と護持仏」（市指定有形文化財）をはじめ、関連する資料を紹介します。「無相大師」とまで仰がれた仏僧としての大きな足跡とともに、この地域の人々に親しまれた〝えげんさん〟としての姿や、その後の習俗・文化に与えた影響について改めて見つめ直します。なお一一月一日から七日までの一週間は文化庁の定める「文化財保護強調週間」であり、地域の文化財について理解を深めるきっかけとなれば幸いです。

二〇二六年一一月　美濃加茂市民ミュージアム（みのかも文化の森）

伊深の里と関山慧玄

関山慧玄（一二七七－一三六〇）は建治三（一二七七）年、信濃国（現長野県）下高井郡中野の城主・高梨高家の二男として生まれました。はじめは叔父の月谷宗忠につき、徳治二（一三〇七）年には、その師・南浦紹明（大応国師）の建長寺に入って「慧眼」という僧名を授けられます。その後、京都・大徳寺の宗峰妙超（大燈国師）に師事し、元徳元（一三二九）年に開悟（悟りを開くこと）して宗峰から「関山」の号を受け、名を「慧玄」と改めました。

関山はそののち、「悟後の長養」（身分を隠して世俗に入り悟りを深める修行）のため美濃に入ります。明応五（一四九六）年脱稿の『正法山六祖伝』には「濃陽の深山」とされますが、地域での伝承や寺伝なども踏まえ、現在では美濃加茂市の伊深地域が定説となっています。この地で関山は、村人とともに田畑を耕しながら、余暇には村人に説法を施し経典を読み聞かせつつ、夜更けには庵に帰って坐禅修行を重ねていたと伝わります。村人からは「えげんさ」「えげん坊」などと心安く呼ばれ、村人の頼みに任せて遠方まで遣いに出ることもあったようです。

そのころ都では、禅への信仰に篤い花園法皇が、師と仰ぐ宗峰妙超の推薦によって関山を後継者として求めます。法皇は勅使を派遣して関山を探し出し、最後に関山はその詔に応じて伊深の地を後にすることとなりました。京都にのぼった関山慧玄はこうして、禅寺に改められた花園の離宮を、康永元（一三四二）年に大本山妙心寺として開山することとなるのです。

禅徳寺の「箱笈と護持仏」

伊深にのこる関山慧玄の伝承のなかで、ただ一つ現物の資料にまつわるものが、禅徳寺所蔵の「箱笈と護持仏」（市指定有形文化財）です。関山が伊深に残したとのいわれがあり、天和三（一六八三）年の「妙法山中興記」には、この笈が辿った経緯が記されます。これによると、禅徳寺の前住がこの寺に安置した箱笈を、時の住職であった玄與（げんよ）が師の一秀玄廣（いっしゅうげんこう）に頼んで補修や荘厳などを施し、内部に禅徳寺の旧本尊を納めたといいます。

この玄與という僧は、のちに正眼寺の第一世となる太極禅師とともに、その前身となる円成寺の創建に関わった人物です。常に関山嶺の山林を見廻り松木を植えながら、祖師の遺風を慕っていたといい、関山ゆかりの箱笈の保存を図り手を加えたことも、大師に対する崇敬の思いの表れだったのでしょう。

この箱笈は遺例の中でも古式を示すものの、関山が伊深にいた時期よりも時代が下ることが推測され、関山が所持したという伝説の信憑性については一考の余地があります。しかし、関山を称える僧たちによって継承され、人々の祈りの対象であったことは、この地域で紡がれてきた確かな営みであり、関山の遺した足跡を捉える上で大きな意味を持つでしょう。

禅徳寺（美濃加茂市伊深町）

禅僧たちを繋ぐもの

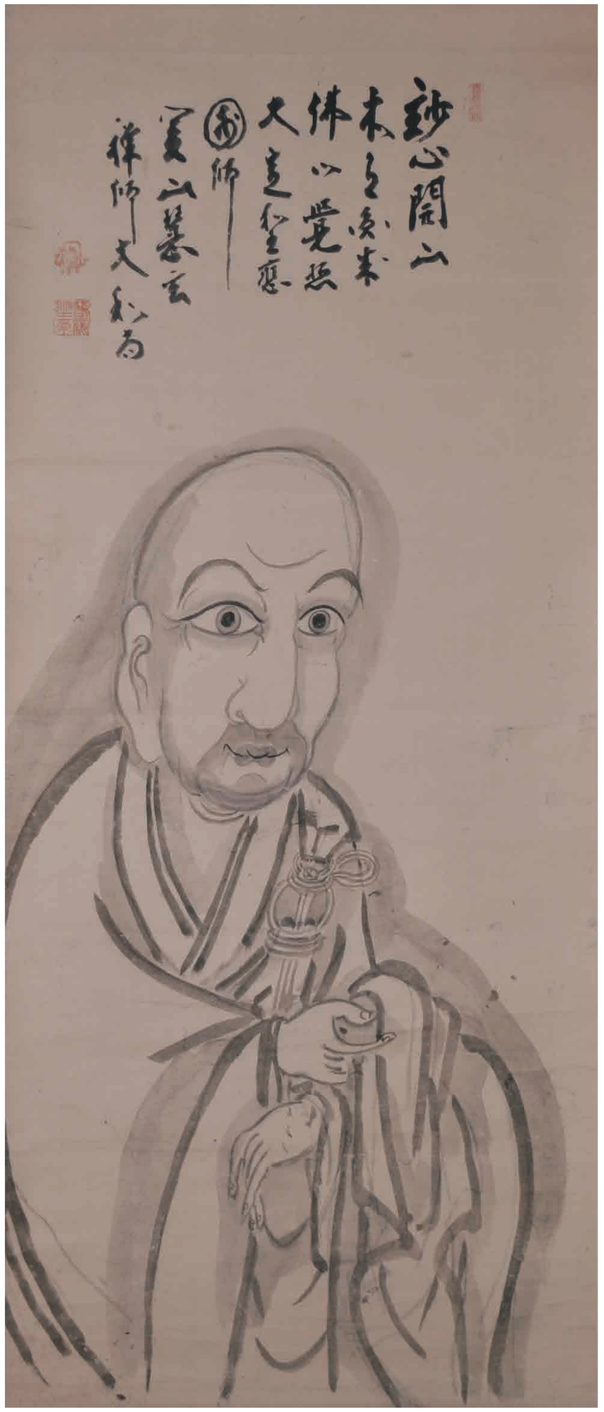
南浦紹明（大応国師）、宗峰妙超（大燈国師）、関山慧玄（無相大師）の三代から続く臨済宗妙心寺派の法脈は、祖師からそれぞれ一字ずつ文字をとり「応燈関の一流」ともいい呼ばれます。いずれも日本の臨済宗の草創期を支えた人物であり、妙心寺派の僧たちにとっては特に尊重すべきものでした。

臨済宗妙心寺派中興の祖とされ、禅画をよくした白隠慧鶴（一六八五―一七六八）は、関山をはじめとしてこの三祖の頂相や法語など墨蹟を多く遺しています。白隠はこの地域とも縁が深く、江戸時代の正徳年間に伊深村の隣の村である山之上村に一時逗留していました。

このとき関山が伊深を発った際のある逸話を聞き、身の毛がよだつほどの衝撃を受けたと語られます。

また弘化四（一八四七）年に正眼寺に入った雪潭紹璞は、再興した僧堂を、関山の故事に基づき「牛欄」と名付けました。その時の感動を雪潭は文字で記し、祖師の遺風をこの地に存続させる決意を固めています。このように禅僧たちの作品や逸話から、関山の存在の大きさを再認識させられるようです。

臨済宗妙心寺派は中世以降、美濃地域において大きく栄え、各地にその法脈が広がっていきます。土岐氏の庇護も背景の一つにありますが、関山が繋いだ妙心寺との結びつきと、その法を受け継ぐ僧たちの存在が、地域に定着する下地となったのかもしれません。



無相大師（関山慧玄）図　白隠慧鶴　筆
〔八百津町指定文化財、正傳寺（八百津町）蔵〕

参考文献

・梶浦逸外『伊深夜話』（正眼寺、一九三九年）
・正眼寺誌編纂委員会 編『妙法山正眼禅寺誌』（一九五四年）
・正眼寺専門道場 編『関山無相大師』（大宝印刷、一九五五年）
・岡崎譲治「修験道山伏概説」（MUSEUM ３４７号、一九八〇年）
・竹貫 元勝『伊深正眼禅寺の歩み』（耕文社、二〇〇五年）
・加藤正俊『関山慧玄と初期妙心寺』（同朋舎、二〇〇六年）
・美濃加茂市民ミュージアム『墨痕に咲う―美濃の禅画の世界
白隠と仙厓と―』（二〇一三年）

「無相大師牧牛之図」

【複 製】（原本：正眼寺 蔵）
雪潭紹撲 筆

「十牛図」とは、禅の修行における悟りへの道のりを、牛と牛飼いの関係になぞらえ十段階の絵で表したものです。捕まえた牛を飼いならした状態である「牧牛」はその第五図にあたり、本来の自己の姿を掴んだのちも油断なく修行を重ねている段階を示します。この絵では、悟りを得てなおも伊深の地で牛とともに修行に打ち込む関山の姿を、「牧牛図」の画題に重ね合わせたのでしょう。弘化４(1847)年に正眼寺の住職となった作者である雪潭紹璞の関山への眼差しが伝わるようです。

美濃加茂市民ミュージアム 蔵

『伊深夜話』

梶浦逸外 著
昭和 14（1939）年 発行

昭和時代に正眼寺の住職を務めた梶浦逸外（1896–1981）による著作。「伊深夜話」と「牧牛禅話」の２編からなり、前段では特に関山慧玄にまつわる正眼寺の話題を中心に、伊深村の成り立ちや名所旧跡などについても記述しています。その中で「関山大師の御威徳」という項目があり、その霊験については数えきれないとした上で、正眼寺の僧として実際に見聞した事柄も交えながら、関山大師信仰がもたらしたさまざまな利益について列記しています。

美濃加茂市民ミュージアム 蔵

「明治廿八年調 古社寺調査表」

制作：伊深村役場
明治 28（1895）年

明治時代に行われた伊深村内における社寺の調査書類。正眼寺の記録もあり、寺の歴史や規模ついてまとめています。その中で「坐禅石」や「牛牧」の地名などを挙げながら、伊深地域の関山にまつわる話は、言い伝えや様々な本などに散見されると述べています。「記録上区々ニシテ沿革ノ証憑未ダ詳ナラズ」とその由来の曖昧さについても指摘していますが、添付された境内の絵図には「坐禅石」や「勅使巌」も丁寧に描きこまれていることが注目されます。

美濃加茂市民ミュージアム 蔵

「濃州伊深正眼寺絵はがき」

関町　須田写真館 発行
年代不明
美濃加茂市民ミュージアム 蔵

箱笈のパンフレット類

禅徳寺 発行

禅徳寺で配られていた箱笈のパンフレット。挟み込まれていた「無相大師遺留笈佛開扉祈祷」の短冊によると、平成5（1993)年に御開帳として箱笈の公開がされたようです。

美濃加茂市民ミュージアム 蔵

美濃加茂市指定有形文化財

護持仏（ごじぶつ）

室町時代

箱笈の観音扉内に納められていた護持仏。釈迦如来を中尊として、脇侍に象に座る普賢菩薩（むかって右）、獅子に坐す文殊菩薩（同左）を配置する三尊形式とし、厨子内に安置されます。箱笈とは一具ではなく、「正眼寺中興記」によればこの像はもともと禅徳寺の本尊として祀られていたもののようです。ここでは運慶の作とされますが、実際の作者は不明です。しかし小像にも関わらず螺髪は丁寧に刻み出し、衣の衣文も精緻なもので、作者の技術の高さが推察されます。

禅徳寺 蔵
（美濃加茂市民ミュージアム寄託）

美濃加茂市指定有形文化財

箱笈（はこおい）

室町前期から中期

関山慧玄が伊深を離れる際に、この地に残したと伝わる箱笈。外張りの板に四脚のついた箱笈としては基本的な形式をとり、全体を漆塗り仕上げとし、真鍮と鉄製の飾り金具が施された優品です。小振りな大きさや装飾の文様、細部の彫りなどの意匠から、現存する箱笈の中でも古式に分類されます。「正眼寺中興記」によると、江戸時代に禅徳寺第四世の玄與がこの笈に補修や装飾などの手を施し、禅徳寺の「故の本尊」（旧本尊の意味か）である三尊仏を安置し、尊崇していたと伝わります。

禅徳寺 蔵
（美濃加茂市民ミュージアム寄託）

箱笈の紐（はこおいのひも）

年代不明

関山の遺したとされる箱笈は霊験あらたかなものとされ、古くからこれに祈願する者が後を絶ちませんでした。箱笈の背負い紐にも同様の利益があると信じられ、これを人の頭に戴かせることで精神病者や重病人は全快し、身重の女性は安産するとの言い伝えから、遠方からもこの紐を借りに来ることがあったようです。なかには抜き取った紐の糸を持ち帰って家のお守りとする者も現れたため、門外不出となりましたが、この風習は明治頃まで続いたといいます。

禅徳寺 蔵
（美濃加茂市民ミュージアム寄託）

以上のパネルは、2026 年 11 月 1 日から 11 月 7 日にかけて開催された特別展「えげんさんに会える日」の解説パネルをまとめたものです。

遺跡の再興と正眼寺の建立

延文五（一三六〇）年に関山慧玄が遷化したのち、その由緒地である伊深には祖師を慕って多くの禅僧たちが足を踏み入れます。大林善育はそのさきがけとして、応安四（一三七一）年に龍安寺の前身である永安寺を開きました。寛永年間のはじめには、錐翁慧勤が関山嶺に草庵を一時構えています。次にこの地に入った太極唯一は関山の遺跡の復興に強い意欲をもやし、万治元（一六五八）年に禅徳寺の玄與とともに初祖山円成寺を創建しました。寛文九（一六六九）年には、領主の佐藤吉次から敷地と用材の寄進を受けて本格的な伽藍造営が行われ、このとき寺号を「妙法山正眼寺」に改めています。このころ太極が依頼していた関山慧玄像が京都から届けられ、本山に倣って「微笑塔」名付けた堂に安置したようです。

その後も安政二（一八五五）年の僧堂の建設をはじめ、明治三二（一八九九）年の本堂、開山堂の造営など着々と伽藍の整備が進みますが、時には近郷や遠方からも大勢の人々の普請の協力があったようです。常に開山を関山慧玄と仰ぎ、その遺風を偲びながら、こうして「妙心寺の奥の院」と呼ばれるまでの寺格を整えていったのです。

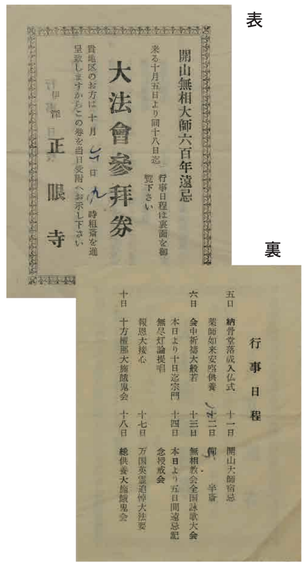
正眼寺（美濃加茂市伊深町）

「開山忌」のあゆみ

毎年一〇月一二日、正眼寺では開山である関山慧玄をしのんで開山忌が執り行われます。その歴史は長く、文政年間には一時的に規模が縮小することもありましたが、天保三（一八三二）年に至って世間に公開しての開山忌が復興されました。これを機として、寺では開山忌に関する詳細な規定も作られます。香資（こうし）役、風呂番、水汲みなどの出役を村人の中から募っており、このころから寺内にとどまらず地域の人々を巻き込んだ一大行事であったことがわかります。

昭和初期に書かれた『伊深夜話』によると、当日は近郷から数万人ものの参詣者があり、門前には芝居、活動写真、見せ物などの屋台が軒を連ねたようです。あまりの人出に太田と関からは警官が派遣されるほどで、乗合自動車は終日途切れなく往復したといい、その盛況ぶりがうかがえます。

村では数日前からお寺とともに大勢の人々を迎え入れる準備が整えられ、当日もお茶の接待や御斎の準備などに終日奉仕をしました。昭和三〇（一九五五）年の六百年遠忌は特に盛大なもので、劇作家の榊原政常（さかきばらまさつね）作の「伊深の慧玄さん」という劇も催されたようです。今でも開山忌は伊深にとって最大の行事であり、地域の暮らしの中に溶け込んでいます。



無相大師六百年遠忌参拝券
〔昭和 30（1955）年、館蔵〕

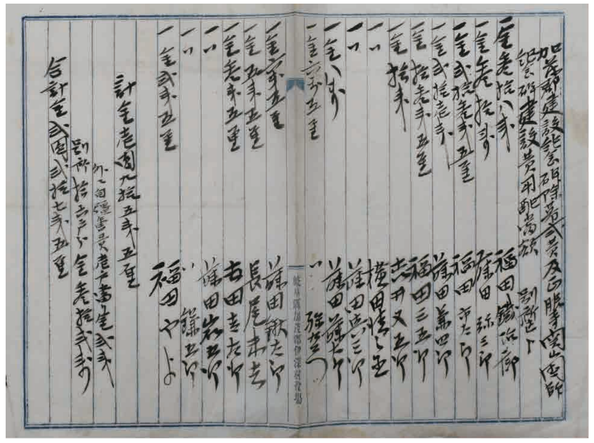
「開山忌の賑わい」
〔『伊深夜話』（昭和 14（1939）年）口絵より〕

今年（2026 年 10 月 12 日）の開山忌（お斎）のようす

石碑の建立と「牛石」

正眼寺参道の右手、勅使巌（ちょくしいわ）の真下にある「無相大師追慕之碑」と刻まれた一つの石碑をご存知でしょうか。明治四十三（一九一〇）年四月の年紀があり、関山慧玄の没後五五〇年を記念して伊深村が建立したものとわかります。題字の余白にある4行ほどの碑文には、関山が伊深を発ってから数百年を経てもなお村を包み込む、師の遺徳に対する村としての深い思いが滲むようです。その右手に横たわる平たい石は「牛石」と呼ばれ、ある伝承がのこっています。明治時代、日露戦争の忠魂碑を建立するために村中で碑石を探していたところ、偶然に関山との縁も深い牛のかたちの石を見つけ、村民の奉仕でこの場所まで運んできたようです。

（渡辺寛『伊深の歴史』）



「加茂郡建設紀念碑除幕式費及正眼寺関山国師紀念碑建設費用配当額」

〔年代不明、館蔵〕

加茂郡建設紀念碑の除幕式と「関山国師紀念碑」の建設に関わる費用の配当額を示した表で、伊深村の字「別所」のものです。現存する「無相大師追慕之碑」との関連は不明ですが、各戸から集められた資金によって、関山慧玄の碑を建設する動きが村内であったことがわかります。

▼〔碑文の書き下し文〕

関山國師滅後五百五十年
聖上勅諡無相大師
蓋し稀世の特典と謂ふべき也
徳風の化、関山の峰より高く
垂手の跡、牧牛の流より長し
邑民敬慕に堪えず
是に於てか此碑を建つ

「無相大師追慕之碑」

聖上勅諡　天皇が勅命によって与えた称号の意。
蓋し　まさしく
稀世の特典　世にまれな恩恵。
徳風の化　徳が人を感化するさまを風にたとえていった語。
垂手　親が手を垂れて子を育てるように教化すること。
邑民　村人のこと。

地域の誇りとして歌い継がれる「えげんさん」

これまで伊深の村や学校などで歌い継がれてきた唱歌や校歌には、いずれも歌詞の中に「正眼寺」や「無相大師」の名前が登場します。大正時代に生まれた唱歌である「伊深の里」や、昭和二（一九二七）年に伊深小学校教諭の早川敏がつくった曲などは、地域の歌として長く伊深の人々の記憶にのこり続けたようです。

かつての村人たちに教化を与えながら生活を共にし、後の時代に至ってもその事跡が村を超えて影響を与え続けた関山慧玄の存在は、伊深の人々にとっての大きな誇りであり、この地域をかたちづくり連帯感を育むうえで欠かせないものだったのでしょう。特に伊深小学校は、明治六（一九七三）年に正眼寺の見桃庵という塔頭を使って開かれた秀文義校を前身としており、その創立と深い関係があります。昭和四〇年代に制定された現校歌にもその歴史が歌詞として織り込まれ、今でも子どもたちに校歌として親しまれています。

♫「伊深の里の歌」　1番
制定：大正九（一九二〇）年ごろ

伊深の里は　岐阜県の
加茂の郡に　名も高き
無相大師の　開かれし
正眼禅寺の　在るところ

♫伊深小学校 旧校歌　1・2番
制定：昭和二（一九二七）年ごろ

ひむがし美濃の　山中に
この寺ありと　聞えつる
其の名もしるき　名刹は
わが住む里の　誇りなる

名もゆかりなる　関山に
大師苦行の　跡とへば
幾ももとせの　そのかみも
すゞろゆかしく　偲ばるる

♫伊深小学校 現校歌　2番
制定：昭和四〇年代

明治六年　見桃庵
無相大師　ゆかりの地
ここに生まれた　わが学舎
秀文義校の　精神うけ継ぎ
いや栄えゆく　伊深小学校

伊深にのこる大師の伝承

ともに農耕に勤しんだ修行僧が時の法皇が求めるほどの高僧であったことは、当時の村人たちに大きな衝撃を与え、その出来事は畏敬の念をもって長く後世に語り継がれたことでしょう。伊深には今でも、関山に由来する地名や伝承が数多く残されています。伝説的な内容もありますが、様々な言い伝えは当地に関山が現れたことに確かな現実味を持たせ、その一つひとつから当時の状況だけでなく、関山の人柄や村人との関係性までも垣間見えるようです。

牛牧 ①

伊深町の関山嶺と高木山に囲まれた盆地一帯を指し、川浦川のうちこの地区を流れる間を「牛牧川」とも称します。関山が牛を飼い慣らし、伊深の村人とともに田を作ったとの伝承がある場所です。

薬師谷 ②

太平山の中腹一帯に「薬師谷」の字名が残り、もともと伊深にあった善福寺という寺院が、天正年間の信長の堂洞攻めに遭った際、一時的に本尊の薬師如来が遷座したとの伝承があります。牛牧地域では、この場所こそが大師長養の霊跡として語られていたようで、関山はここに坐禅しつつ、昼には山を下りて農耕などの手伝いをしたとされます。

関山嶺 ③

正眼寺の境内を含む一連の山脈、またその最高峰を指します。伊深周辺の関山大師の遺跡の中でも象徴的な存在であり、その周囲に神社や仏閣が展開していることからも、その信仰の中心として村人たちに尊崇の念をもって仰がれていたようです。

坐禅石の近くにある関山大師像

関也 ④

伊深町の南方、県道が交わる地点に関也という字名があります。「せきや」と俗称し、古くはこの一帯は「関也庄」と呼ばれたようです。その由来は、関山がいくら見送りを固辞しても、名残を惜しむ村人たちの列を止められなかったため、「ここを関所だと思って諦めて帰ってくれ」と言ったとも、せめて関まで送ろうとする村人に対し、「ここを関だと思って」別れたともいわれます。

「関山嶺ヨリ関也庄ヲ望ム」

木戸口

関山嶺の南側に「木戸口」という地名がのこります。勅使の一行が関山を迎えにきた際に、これを聞きつけて遠方からも多くの人々が集まったといい、木の戸を設けて無断で入ることを禁じたことに由来するといいます。

坐禅石 ⑤

関山嶺の中腹には屹立した岩がいくつも連なる場所があり、その一つに関山が坐禅修行を重ねたという「坐禅石」があります。現在は樹林に覆われていますが、かつてはこの上からはるか遠くまで見渡せたようです。これまで関山の史蹟を尋ねて伊深を訪れた僧たちの中には、師に追随してこの石に坐した者もいたとされ、『伊深夜話』にも、正眼寺の修行僧たちが夜な夜なこの山に登りこの付近で修行に励んでいたことが記されます。

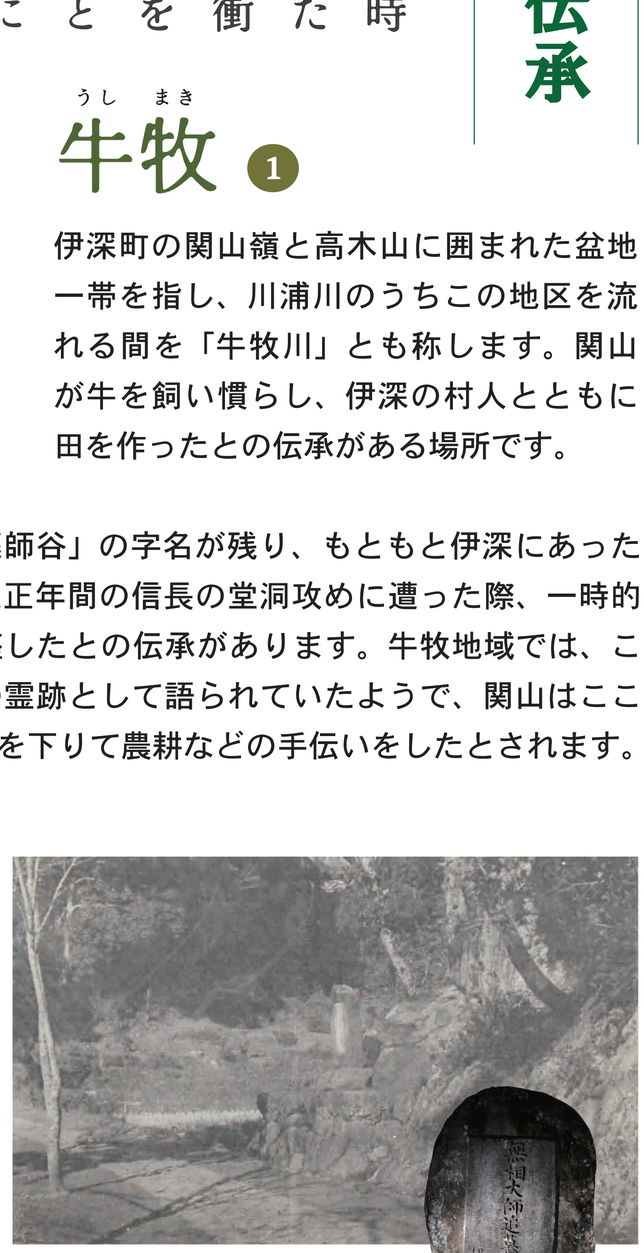
おきゃれ畷

関山嶺の麓、東西に通じる道を俗にこう呼び、関山が伊深を出発する際、離別を惜しむ村人の見送りを「おきゃれおきゃれ」（お帰りお帰り）と固辞されたためといわれます。「妙法山中興記」には「於計縄手」とも記され、村人の一人が笈を担いでお供しようとしたところ、「おけおけ」（捨ておけ捨ておけ）と言った言葉によるという説もあるようです。

渡輦橋と涙笹 ⑥

伊深と加治田の境にある大洞川に架けられた橋は、関山を乗せた輦（天子の車）が渡ったことを記念し「渡輦橋」と名付けられました。この橋付近の川沿いにはかつて笹が一面に生い茂り、その葉先は一年中白く変色していました。関山を見送る際、村人たちが牽いてきた牛たちが流した涙で先が枯れたといい、村人は俗に「牛の涙笹」と呼んだようです。

「渡輦橋ヨリ関也及伊深ヲ望」


「無相大師追慕之碑」

勅使巌 ⑧

正眼寺の参道右手、放生池の畔にある大岩で、関山を探しに伊深に来た勅使が、関山へ法皇の詔を宣した場所とされます。一説には、勅使を乗せた馬がここより先に進まないため、怪しんだ勅使がこの岩の上から四方を見渡したところ、俗世から隔絶された清らかな風景が広がっていたため、関山がこの地にいることを確信したといいます。

箱笈 ⑦

関山が京に向けて伊深を旅立つ際、この地に残したとの伝承をもつ笈です。のちの時代には、関山の遺物として人々からの信仰も高まりをみせ、祈願に訪れる者も多かったようです。

※関山慧玄の伊深にまつわる伝説や地名は、梶浦逸外『伊深夜話』（正眼寺、一九三九年）・正眼寺誌編纂委員会 編『妙法山正眼禅寺誌』（一九五四年）等を参考に作成しました。

市指定有形文化財

「箱笈と護持仏」

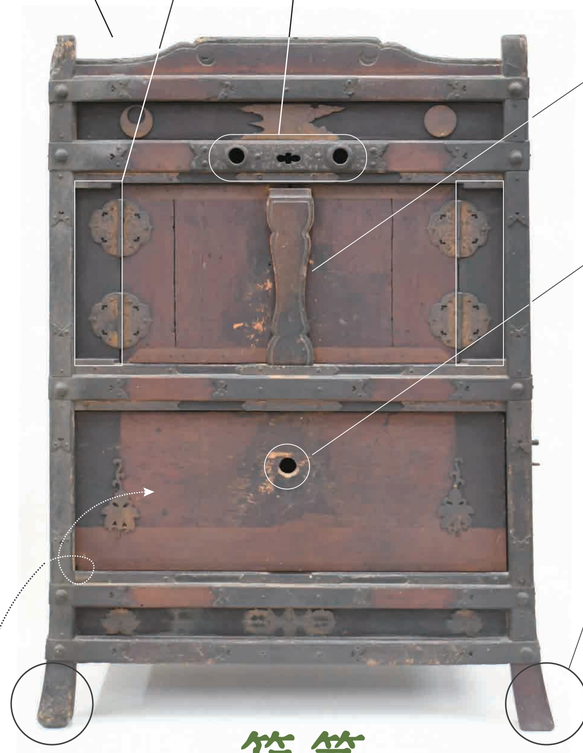
箱笈とは僧や修験者が仏具や生活用品を入れて背負う箱形の笈のことです。単なる収納具ではなく、笈自体を母胎や人体に見立てる象徴的な意味合いもあり、修法においても重要な役目を果たしました。文様や金具などには創意工夫が凝らされており、使用者の趣味や信仰・時代の趣向を推察することができる、実用性と宗教性を兼ね備えた文化財です。

天板
天板は後方に向かって傾斜がつき、雨水を流す仕組みとなっている。

小脇板
観音扉は小脇板とともに取り外しが可能。山の中で笈を仏壇厨子として修法をする際に、この扉を開いて前机として上に仏具などをのせたものと思われる。

肩紐の穴
肩紐を通す穴。それぞれの端は手前の脚に結びつける。

修法の際のイメージ



額板（山形）
欄間（袋戸）
観音開き扉
ケンドン扉
腰嵌
※こちらが背に接する面

帖木
扉が開かないように差し込む木の板。様々な形がある。

指孔
ケンドン扉を開くための手掛かりの穴。片方にスライドし、隙間を作って取り外す。帖木は欠失している。

四つの脚
脚を４本とするのは、山伏の箱笈の特徴の一つ。それぞれ外に向かって開き、安定性を保っている。

箱笈

【さまざまな意匠】

月輪　日輪　蓮華唐草　猪の目
瑞雲文　（花の文）　三日月
三鈷杵　蓮華　桐文

【修理を重ねた痕跡】

箱笈のいたるところ新しい木材を継いだり、補強したりしている箇所がみられ、修復をしながら大切に守り伝えられてきたことがわかる。

厨子

護持仏

普賢菩薩

釈迦如来

文殊菩薩

関山慧玄 関連年表

年	月	関山慧玄、正眼寺に関わる事項
建治三年	一二七七	関山慧玄、信濃国（現 長野県）下高井郡中野の城主・高梨高家の二男として生まれる。
徳治二年	一三〇七	関山慧玄、「慧眼」の名を南浦紹明から授かる。
元徳元年	一三二九	関山慧玄、「関山」号を宗峰妙超から授かり、「慧玄」と改める。
元徳二年	一三三〇	関山慧玄、宗峰妙超から印可を受ける。
		関山慧玄、この間に美濃の伊深に入り、悟後の修行を重ねたとされる。
建武四年	一三三七	宗峰妙超、花園法皇創建の禅師を正法山妙心寺と命名する。
康永元年	一三四二	関山慧玄、妙心寺の開山となる。
延文五年	一三六〇	関山慧玄が遷化する（亡くなる）。
応安四年	一三七一	大林善育が伊深に永安寺を創建する。
寛永元年	一六二三	このころ、錐翁慧勤、伊深に草庵を結ぶ。
万治元年	一六五八	太極唯一、伊深に至る。
万治二年	一六五九	太極唯一、禅徳寺の玄與とともに、関山由緒地の復興のため募縁活動を始める。
万治三年	一六六〇	太極唯一、初祖山円成寺が創建される。
寛文九年	一六六九	佐藤吉次、寺地や資材を寄進。円成寺は妙法山正眼寺と改号する。
寛文一一年	一六七一	太極唯一、関山の像を微笑塔に安置する。
延宝二年	一六七四	本山妙心寺、小判や経典などを正眼寺に寄進する。
延宝五年	一六七七	佐藤吉次を祀る了心院が境内に建立される。
天和三年	一六八三	橘洲祖休、「妙法山中興記」を撰す。
元禄四年	一六九一	方丈が新築される。
元禄五年	一六九二	庫裏、書斎、中門、鐘楼が建造される。
享保一五年	一七三〇	佐藤家、正眼寺に境内、山林、竹木伐採の禁令を出す。
安政二年	一八五五	僧堂が落成する。
明治四年	一八七一	伊深代官小田島源太郎、武具を奉納する。
明治三二年	一八九九	方丈（本堂）、庫裏、開山堂の起工式が行われる。
明治四〇年	一九〇七	本堂の落慶入仏法要が行われる。
明治四二年	一九〇九	明治天皇から無相大師の号を追諡される。
昭和三〇年	一九五五	正眼短期大学が開校する。「正眼寺夏期講座」が始まる。
昭和三九年	一九六四	「第一回正眼茶会」と「茶筅供養」が始まる。
昭和四四年	一九六九	梶浦逸外、妙心寺管長に就任する。

■正眼寺誌編纂委員会 編『妙法山正眼禅寺誌』（一九五四年）、竹貫元勝『伊深正眼禅寺の歩み』（耕文社、二〇〇五年）をもとに作成したものです。